

美しく生きる——人生はオペラと共に

# 中川牧三

明治35年(1902年)12月7日生まれ。今年100歳を迎えられる中川牧三さんは、声楽家の草分けとして、またオペラの開拓者として、戦前戦後を通じ日本の音楽界に多大な功績を残されている。

そして驚くことに、現在もお現役。

月に10回はオペラの指導者として後進の指導にあたり、昨年は年に7回、日本イタリア協会会長として大阪とイタリア・ボローニャにある自宅を往復。そのバイタリティーと音楽に対する情熱には、ただただ敬服するばかりである。

本誌編集部＝取材  
Interview by Agora

西園寺 薫＝構成  
Text by Kaoru Satonji

TAKERU＝撮影  
Photo by TAKERU

## 音楽好きの少年

**編集部** 今日お会いして、中川さんのお元気な様子には正直言っておどろいております。一二月には一〇〇歳の誕生日を迎えられるわけですが、いまでも歌っていらっしゃるのですか。

**中川** 毎日ではありませんが、週に五日ほど(笑)それに月に一回は自宅でレッスンもやっております。時間は一応二時間程度なんです。気が付くといつもオーバーしておりますね(笑)

**編集部** レッスンが終わると随分お疲れになるのでは。

**中川** いえいえ、とてもいい運動ですから(笑)。歌を歌っているときと教えているときが一番楽しくて気持ちがいいですね。

**編集部** 歌うことは健康の秘訣でもあるんですね。ところで中川さんがオペラに出会ったきっかけは。

**中川** 私は子供のころから家にオルガンとバイオリンがありましたので音楽好きになる土壌が我が家にはあったのだと思います。ただ当時の日本で、まともな歌といえるものは賛美歌くらいだったんですよ。それで賛美歌が歌いたくて同志社中学に入学したんですね。途中、兄の勧めで二商(京都市立商業学校)に移りましたが大学は同志社に戻りました。あの頃はバイオリン

に熱中していて、毎日5時間は練習。いつしか音楽仲間と一緒に演奏会をやるようになって、自分はどうしても音楽と離れられないと思うようになりました。

**編集部** 音楽の勉強もその頃から始められたのですか。

**中川** 大正一〇年頃だったと思いますが、モンテカルロ王立劇場で活躍していたロシア人のソプラノ歌手オルガ・カラスロワさんが日本に亡命してきて、その方に音楽を習ったのが最初です。大阪の清水教会と菅屋の自宅と週二回通いました。彼女は本格的なオペラ歌手でしたから、そういった方に出会えたことが良かったのでしょう。

## 人生を変えたドイツ留学

**編集部** その後、ドイツ、イタリア、アメリカへと留学されるわけですね。当時の海外留学といえは今とは比べ物にならないほどの苦労があったのでは。

**中川** 確かに大変ではありましたが、近衛先生が後見人でしたからベルリンではとても素晴らしい巨匠に師事することができましたね。指揮法はオットクレンペラー、作曲はヒンデミット、バイオリンはベルリン国立音楽院でカール・フレッシュに、声楽はワイセンボーンなど錚々たる顔触れです。

**編集部** 歴史のページを垣間見て

いるかのようです。

**中川** 本当です。あの頃は特に優れた偉い巨匠がいた時代ですね。ベルリンにはその頃、親友の京藤秀雄君がいました。貴志康一君は同じ下宿でしたし、夏目漱石の息子さんや、奥田良三君もいましたよ。

## ベル・カントとの出会い

**中川** ベルリンで勉強したことやお会いした多くの方々は私にとってかけがえのない財産となりました。しかし何より私の人生を大きく変えたのは、イタリアからベルリンへ演奏に来ていたテノール達のリサイタルを聴いた時でした。彼らのいずれもの発声技法が奇妙に思えるほど同じ様式に揃っていたのに驚いて、いつ聴いても自然で美しい声には毎回興奮し全身に戦慄が走ったのを今でもはっきりと覚えております。「どうしたらそんな声が出せるのか?」と尋ねてみると、彼らは口を揃えて「イタリアへ来たらしい、イタリアではみんなこんな風に歌うんだよ」といいました。それはバイオリンを極めようとしていた私に大きな衝撃を与えました。「あの声を学びたい。そのためには何としてもイタリアに行くしかない」と。

バイオリンをきっぱりと諦めた私はドイツ留学を一年で切り





中川 牧三(なかがわ まきぞう)  
1902年(明治35年)京都市生まれ。1910年よりバイオリンを学び、20年より声楽をモンテカルロ王立劇場で活躍したソプラノ、オルガ・カラスロワ氏に、和声を菅原明朗氏に、指揮を近衛秀麿氏に学ぶ。1930年、恩師、近衛秀麿氏とともにドイツ、イタリア、アメリカに留学。ミラノ国立音楽院、国立スカラ座歌手養成所へいずれも日本人学生として初めて入学。このとき、発声の神様アルフレッド・チュッキ氏に師事。1932年ピアチエンツァ王立歌劇場に初の日本人歌手としてデビュー。戦後はオペラへの貢献が認められイタリア政府から「カヴァリエウフィーチャーレ」を叙勲。1959年から「ヴェルディ国際声楽コンクール」他、数多くの国際コンクールで審査員を務める。2000年「マルタ騎士勲章」、2001年「マルタ騎士勲章日本大使」を授受。現在、日本イタリア協会会長。

上げ、近衛先生とともにベル・カント唱法の本場であるミラノへと乗り込んだのです。  
**編集部** そのベル・カント唱法とは一体どのような発声法なのですか。

中川 簡単に言いますと、喉に

無理なく低音から高音まで気持ちよく伸びやかに歌うことができる方法。イタリアの伝統的な歌唱法で、美しい声、よい発声、という意味があります。オペラはベル・カントなくしては歌うことはできません。しかしこの

唱法は一朝一夕に完成されたものではなく、古くはメソポタミアで発生し、ギリシャを通じてローマに入ったもの。メソポタミアやローマの古代劇場といえは野外劇場です。そこで何万という人に向かって語り、歌うのですから口先だけの発声法では通用しなかったでしょう。だからベル・カントではその人が持つ真の声を引き出すことに力を入れます。先生たちも「お前の持っている自然な声を出すんだ」と教えます。

**ドイツ・オペラとイタリア・オペラは別物?**

**編集部** ベルリンではなぜベル・カントを学ぶことができないのですか。

中川 ベル・カント唱法とドイツ唱法は横隔膜の使い方が根本的に違っています。

**編集部** そうしますとドイツ・オペラとイタリア・オペラでは歌い方が違う?

中川 元来、オペラとはイタリアで生まれ発達した作品のことを指します。モーツァルトの作品を日本では全部オペラと呼んでいますけど、モーツァルト自身二、三曲をのぞいてあとはほとんどジングスピール(歌芝居)と楽譜に記して自称してい



るようにオペラの形式とは違  
るようです。またワーグナーの場合  
も神話に基づく題材を使ったあ  
たりから「楽劇」と自称してい  
ます。発声から申しまして、

ドイツ語や英語のように前母音  
で発声する国の人々が後母音で歌  
うことは尋常ではなく難しいの  
です。やろうと思っても出来な  
い芸術かもしれません。つまり

極論から申しますと、後母音の  
ベル・カント唱法をマスターで  
きた人は自然な発声でどんなも  
のでも美しく歌えますが逆に前  
母音の唱法では音域の広いイタ  
リアオペラを歌おうとしても美

しく歌うことは難しいというこ  
とです。イタリアオペラとドイ  
ツオペラは発祥の時期も言葉や  
慣習の違いで発展の経緯も異な  
りますが、スカラ座は世界のオ  
ペラの歴史を研究するために、

ワーグナーの作品などドイツも  
のも必ず一曲は上演します。日  
本では明治以来、音楽といえは  
ドイツ。パッハが音楽の父で、ヘ  
ンデルが母。海外から招聘した  
音楽教師もほとんどがドイツ  
人。つまりドイツ経由の音楽し  
か知らなかったわけです。だか

ら私もベルリンに留学したので  
すが、音楽の世界はもっと広く、  
そして奥深いものだということ  
がミラノで勉強して初めてわか  
りました。

**編集部** ミラノでは日本人学生  
として初めて国立音楽院と国立  
スカラ座歌手養成所への入学を  
許可されていますね。

**中川** プリンス・コノエは「あの  
オペラを日本にそっくり持って  
帰ろう。研究せよ」と後押しし  
てくれました。ですからミラノ  
では死に物狂いで勉強しました。

### 戦時中も音楽を忘れず

**編集部** その後、ミラノからカ  
リフォルニアへ移られ、ハリウッ  
ドの名門「チャイニーズ・グロ  
マン」劇場に日本人として初め  
て出演されます。しかし、風雲  
急を告げ米国内での日本人の活  
動が制限されるのに伴って一時  
帰国。その後、太平洋戦争が始  
まるわけですが、戦時中はやは  
り音楽とは疎遠になりましたか。

**中川** 当時日本はドイツ、イタ  
リアと三国同盟を結んでおりま  
したから両国に留学経験がある  
ということ、私はただ一人の

中支派遣総軍参謀部幕僚とし  
て、上海で外交交渉を行なった  
り、上海陸軍報道部のスポーク  
スマンも一人で担当していま  
した。その一方で文化担当将校  
として、当時世界最高水準を誇  
るといわれた上海交響楽団やロ  
シアバレエの監督兼指揮者をや  
っておりましたから音楽と疎遠  
になることはなかったですね。  
上海へは朝比奈隆君や服部良一  
君、それに李香蘭など八〇余名  
の人を次々と呼んで文化運動を  
推進しておりました。

**編集部** 当時の上海といえば世  
界外交の中心地でしたね。

**中川** 友好国、敵国入り乱れて  
の情報戦でした。スパイも沢山  
いました。まさに情報のるつぼ。  
私は招集されるまで、酒もタバ  
コも飲みませんでした。社交  
上飲む機会が多くなりました。  
この時ばかりは情報を得るため  
に毎晩飲んでいましたね(笑)

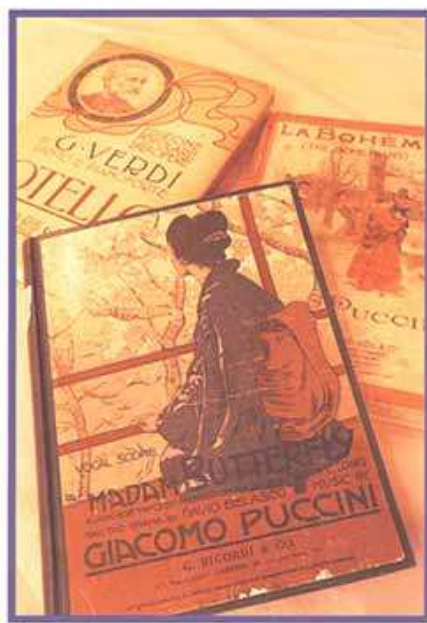
### 音楽家育成には時間がかかる

**編集部** 終戦で引き上げてこら  
れてからが、日本での本格的な  
活動のスタートですね。

**中川** はい。でも、戦中戦後の

七年間を音楽をやっていた頃と  
は全く違う神経で死線を超え  
て生きのびてきた私にとつて、  
焼け野原みなって混乱していた  
日本に戻った時「これで私自身  
の演奏家としての人生も終わっ  
た」と思いました。帰還の翌日  
から東都第一軍団司令部で勤務  
する職を得て、オーケストラか  
らジャズバンドまで進駐軍に必  
要な音楽を供給する役職を任せ  
られましたので需要に応じてジャ

邦初公開)など二五〜一六曲の  
オペラを京都、大阪、大津、奈  
良と近畿各地で次々と上演しま  
した。その頃はお米も配給制で、  
大阪など歩けば爆撃の灰が舞い  
上がる時でしたから「ベル・カン  
トって何？」といわれながら本  
当に苦労しました。それでも舞  
台は本格的でしたし、オーケス  
トラも東京から「東フィル」を呼  
んでいました。関西の楽団にと  
っては初めての衝撃的なイベン



「オテッロ」「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」…。  
本棚にあるボーカルスコアのほとんどが初版本

ンを超えた仕事をしました。

NHKなど戦前にやっていた幾  
つかの合唱団も再編し、少しづ  
つ気を取り戻して音楽大学の再  
建にとりかかろうとしていた時、  
進駐軍や毎日新聞社の全面的な  
協力を得て、関西で最初の本格  
的なオペラを上演することにな  
ったのです。演目は「カヴァレリ  
アルステイカーナ」続いて「パ  
リアッチ」アミーゴ・フリッツ」  
「椿姫」「蝶々夫人」「ルチア」(本

トであったと思います。

**編集部** 近年、日本の音楽家も  
海外のコンクールで優秀な成績  
を収めております。中川さんの  
功労がやっとな報われつつあると  
いうことですね。

**中川** はい、私のやっているこ  
とは遠距離砲を打っているよう  
なものです。今から四〇数年  
前に日本人として初めて国際コ  
ンクールに招かれ、イタリアや  
スペイン、アメリカの各地で運





今年100歳を超えられるとは思えぬ若々しさ。イタリアでは誰もが本当の年齢を知るとあやかるべく抱擁してくるという

て、先入親に左右されなずに国際水準で審査してもらい、二人の優勝者へは、留学資金を与えてイタリアの国立音楽学院（授業料免除）へ推薦留学の道を開いてきました。優勝者以外にも秀れた素質を持つ人を数多く国立音楽学院へ送ってきました。私が特別にもらえるのは、七〇年前から続くイタリアとの深い親交の賜で、古い友人達が、私の活動や日本への思いに賛同

編集部 最後に若い世代に、メッセージを頂きたいのですが。中川 日本やドイツでは、生徒や弟子はとにかく先生やお師匠さんの真似をします。先生も教えた通りにやりなさいという。しかしイタリアを含めたラテン系の国では、先生を真似するな、模倣からは何も生まれえないと言われます。このことはこれから日本が進むべき道を、示しているような気がします。



イタリアとの永い友好の証として、昨年授章した「マルタ十字賞グラン・アンバシャトル勲章」

賞委員や審査員を続けています。国際コンクールでは日本人審査員の私がいるのといないので、日本人に対しての審査の結果に影響がありますので、私はこれまで少しでも日本人を国際舞台に出したいと思う一心で審査員を続けてきました。日本でもイタリア・ベル・カントの後継者を育てるために三三年前から、ベル・カントのコンクールを主催しています。外国から審査員を招い

してくれただからでしょう。編集部 最近のオペラブームについてはどうお考えですか。中川 熱狂的に爆発しておりませんね。やはり、イタリアの本物のオペラに接することができるようになったことが大きいのだと思います。ここへ来てイタリアの音楽の素晴らしさ、イタリア・オペラの芸術性の高さに皆さんがやっと気づいたのではないのでしょうか。